

『第9回学生向け講演会』に参加して

富名腰 朝 史 (5年次)

医学科同窓会員の諸先生方、学生の皆さんこんにちは。5年次富名腰と申します。

さる5月29日に「第9回医学科同窓会主催学生向け講演会」が催され、本学保健学科国際地域保健学分野の小林潤先生にご講演頂きました。私も学生の一人として聴講させて頂きましたので、その様子を拙筆ではありますが書かせて頂きたいと思います。

今回、小林先生には「国際保健のパラダイムシフト グローバリゼーションの中でみてきたもの」という演題でご講演して頂きました。まず初めに「援助はなぜするのか」という問いかけが小林先生から会場に投げかけられ、リバタリアンとコミュニタリアンという二つの立場を提示されました。この二つの立場をわかりやすい例を交えながら、どちらが正解ということはない、援助にはこの二つの考えが入っているとした上で先生は、「国際協力の専門家は、なぜ援助をしているのか考えなければならないし、その説明責任を求められる。この分野に興味のある学生は、なぜこの分野に進みたいのか、なぜやりたいのか、考えてほしい」とおっしゃいました。対象が、自分が属するコミュニティだから、もしくは自分との距離が近いから、するのか(またはしたいのか)。対象が困っていて、自分が力になりたいから、するのか(したいのか)。自分の気持ちがあるような原理・信条によって立っているのか、自己認識することが大事なのだと思いました。

先生の「人づくり・国づくり」という言葉も心に深く残ったフレーズの一つでした。教育も国際保健も、利に敏くそして効率を推し進めていく方法でいいのか。もっと“公”の視点に立ったものがないのか。これからさらに医療・保健をも含めた様々な分野でglobal化が進んでいく中だからこそ学生に考えてほしい。そう語りかけられているように感じました。

先生は他にも国際協力と国際開発、プロ・プアとガバナンス、Health migrantと救命の自己矛盾など、様々な示唆に富むお話をされました。そのなかで常に先生はご講演の中で「みなさんに考えてほしい」とおっしゃっていました。私の中での講演という演者が形の決まったモノを提示し、その出来上がったモノを聴き手は受け取るというイメージだったのですが、先生のご講演を聴いていると、ただ眺めているだけでは済まず、さあさあ手を引かれていつの間にか舞台上で踊っていた結婚式のカチャーシーの如く、自分だったらこうとらえる、いやこういうとらえ方もあるなど、いつの間にか自分のあたまでフル回転させながら小林先生ワールドに引き込まれていました。そうしているうちにあっという間に時間が過ぎていきました。他の学生たちも同じように感じたのではないのでしょうか。講演後の質疑応答の活発さにも、学生が受け取った思いの熱さが垣間見えた気がします。

最後になりましたが、ご講演戴いた小林先生にこの紙面をお借りして深く御礼申し上げます。また毎年素晴らしい講演会を企画頂いてくださる同窓会の諸先生方、このような有難い機会を私たち学生のために設けて頂き、本当にありがとうございました。

幸 喜 未那子 (3年次)

今回の講演会では、国際保健がグローバルレベルで健康問題、公衆衛生、疫学、国際開発などと密接に関係し、様々な視点をもとに考える必要性があることを知りました。また、狭いコミュニティだけでなく、大きな視野を持って医療活動を行うことの重要性も考えさせられました。

私が印象に残っているのは、タイ北西部にある診療所「メータオクリニック」です。この診療所ではビルマ軍事政権から逃れてきたビルマ難民や移民のために無料診察がなされており、日本においてはNGOメータオクリニック支援会(JAM)から医師や看護師が派遣されているとのことでした。医療機器や医薬品が不足しているなかで多くの患者さんの治療に携わっているというお話を聞き、こうした活動が世界の医療や健康、予防の維持・向上につながっているのだと思いました。

それから国際保健の課題として、賃金等の問題から医療従事者たちが先進国の地域に集まり途上国では少なくなるヘルスマイグラントを挙げられていました。国家間の経済格差が医療格差へとつながることは大きな問題だと感じます。これからグローバル化がますます進んでいく中で、私たちは今という現状だけでなく将来的なビジョンを持って医療にあたるのが大切なのだと思いました。

二 木 良 平 (3年次)

私は国際医療に興味を持っていますので、今回の講演会に興味を持ち、参加させて頂きましたが、小林潤先生のお話はとても分かりやすかったですし、国際保健に関して学ぶことがとても多かったです。

導入として小林先生がいわゆる外志向のリバタリアンと地域志向のコミュニタリアンの概念について説明なされ、東日本大震災時の国際支援、もし沖縄の離島で災害が起きたときでも海外に支援を行うかを参加者に問いかけながら、現在国々の支援の行い方が効率性を重視しがち、教育といった時間がかかり一見効率が悪そうな方法が軽視されがちなことなども興味深かったです。

特に今回の講演で学んだことは、貧困層を救済するプロプアという考え方と、支援国の政府を支援するというガバナンスの考え方があり、支援がちゃんと成り立つためには両方が必要であるということです。単純に貧困層を救済するだけでは根本は変わりませんし、政府を支援するだけだと、そこから漏れてしまった人が出てくるため、両方あることの重要性を実感しました。

フィリピンは国策で看護師を要請して世界中に送っています。実際沖縄にも3人ほど働いていることを考えると、どんどんグローバル化が起きている現状で日本も色々な国から医療従事者として働く人が増えていくことが考えられます。海外に出る気がない人でも身近なことでありますので、国際保健を知識として知っておくことはとても重要であると思いました。